『聖レオナール伝』（一一世紀前半）の成立：神の平和運動とのかかわり

小野賢一

はじめに

紀元千年の封建社会のなかで、弱体なカペー朝王権はパリ周辺のわずかな王領地を除いて、政治的影響力を喪失していた。南西フランス地域所在のリモージュでは、公権力秩序をめぐる司教座とサン・マルシアル修道院の対立がそれぞれの拠点のキウィタスとブルグスの軍勢の軍事的衝突にまで拡大した[1]。危機的状況を迎えるなかで、「アントニウスの火」とよばれる麦角性中毒が蔓延する。人々はこれをミレニアムの最後の審判による神罰と捉えて恐れ、深く反省し、贖罪と手打ちの儀式を行った。リモージュで一一世紀前半に行われた神の平和（Pax Dei; Paix de Dieu）運動[2]には、キウィタス所在の司教座とブルグス所在のサン・マルシアル修道院の贖罪と手打ちの儀式としての側面もあった。

リモージュ司教は、神への贖罪と平和のためにサン・レオナール参事会教会を整備した[3]。参事会教会（église collésiale）の整備には、司教座に次ぐ教区内の信仰と秩序維持の拠点の回復という国制的意義が存在した[4]。強化された参事会教会を中心にリモージュの人心掌握という点でサン・マルシアル修道院の強力なプロパガンダ活動[5]の前に劣勢に立たされていた司教座の反撃が始まった。かくして、神の平和運動のさなかにその水面下で、剣をペンに持ち替えてのサン・マルシアル修道院と司教座の争いが開始された。この時リモージュ司教が切り札としたのが、『聖レオナール伝』である。だが、かくも重要な『聖レオナール伝』について、これまで先行

研究では看過されてきた[6]。写本伝統を探るという伝統的なアプローチに従って『聖レオナール伝』を調査すると、『聖マルシアル伝』[7]とはいかなる関係も見いだせないからである。ところが、実際は『聖レオナール伝』は『聖マルシアル伝』に標的を定めた対抗文書なのである。ライバルとして意識したため逆に意図的に何一つ影響を受けるのを拒否したといってよい。この点については、具体的な事例を挙げて詳細に論じたい。

『聖レオナール伝』の編纂事業は、単に無名の聖人の新しい伝記の編纂が企てられたというものではなく、神の平和運動のさなかに次の争い―司教の肝いりの『聖レオナール伝』と才気煥発なシャバンヌのアデマールの『サン・マルシアル修道院年代記』による宣伝合戦―を生み出す。一一世紀前半に『聖レオナール伝』という一篇の聖人伝から始まった宣伝戦は、年代記、改革文書、図像など様々な媒体を駆使しての双方のメディア戦略合戦の様相を示すようになる。本稿では、『聖マルシアル伝』のヴァージョンのなかでも、一一世紀前半に最も影響力を持った『ウィタ・プロリクシオール』[8]と、これに対抗すべく一一世紀前半に成立した『聖レオナール第一伝記』（以下で『聖レオナール伝』[9]と略記する）を比較検討し、宣伝戦の最初期の状況について明らかにしたい。

第一章　成立期の状況

西欧世界の聖遺物不足は深刻であった。コンスタンティノープルやローマは、聖書に登場する人物や古代の教父などが多く活躍した地域に近く、聖遺物の獲得も容易であったが、地理的に不利なアルプス以北では、自分たちの新しい聖人を創出する以外に、聖遺物の不足を克服するすべがなかった。

リモージュ司教は、神の平和運動期のアキテーヌの人々の巡礼と聖人崇敬に対する希求に応え、それまでほとんど知られていなかった聖レオナール崇敬をリモージュ司教管区全体の崇敬へと発展させ、聖遺物不足を克服しようと企てた。神の平和運動は、聖人崇敬の創出と宣伝の絶好の機会となった[10]。この機会に聖遺物移葬中の奇蹟の発現により聖人認定を行うというアンブロシウスの定式を活用して無名の人物レオナールを聖人とし、リモージュ司教管区公認の聖人崇敬として、アキテーヌ地方全域からリモージュに集まった巡礼者に聖レオナール崇敬を知らしめた。

しかし、このようなパフォーマンスだけで聖人崇敬を正式なものとすることはできなかった。聖レオナール崇敬をリモージュ司教管区公認の崇敬へと発展させるためには、正式な聖人認定の証明書が必要であった[11]。それゆえ、リモージュ司教の主導で聖人伝編纂事業が開始された。その結果、一一世紀前半に完成したのが『聖レオナール伝』である[12]。一見するとプレテクストの寄せ集めの継ぎはぎだらけの空虚なエピソードの羅列に見えるかもしれない。プレテクストの写本伝統の研究というアプローチをとるとそのように見える。だが、実態は全く異なる。何でもないように見えるエピソードのことごとくは、聖人の聖性の論証とライバル聖マルシアルへの対抗という目的のために集められ、配列されているのである。編纂のコンセプトも、絵空事の羅列に見える外見とは裏腹に、あまりにも明確で、これは物語の形式で編まれた聖人の聖性の証明[13]のための論文であったのと同時に政治党派的パンフレットでもあったといえよう。

下記のポンスレによる『アクタ・サンクトールム』の註解でリモージュ司教の主導による成立状況が明らかにされている。それによると、いかにレオナールが無名であったかわかる。その崇敬をリモージュ司教管区公

認のものに発展させようとしていた仕掛人のリモージュ司教でさえよく知らぬ有様であった。

このようにリモージュ司教ジョルダンが命じたので、その当時はまだポワトゥーの学究であったシャルトルのヒルデガールは、彼の師のシャルトル司教フュルベールに以下のように手紙を書いた。「さらにリモージュ司教ジョルダンは、へりくだって、あなた（フュルベール）が彼（ジョルダン）に彼ジョルダンの司教管区で永眠している聖レオナールの伝記を送って欲しいと願っている。」[14]

神の平和運動期の一〇三〇年頃は、聖マルシアル崇敬の人気がすさまじく、『聖レオナール伝』においてもライバルの聖マルシアル崇敬を無視できず、言及せざるを得なかったことが次の記述から窺うことができる。

実際彼レオナールにとって司教聖マルシアルのバジリカを訪れることは、実際最も度々の習慣に属した。だからといって、そのために（マルシアルのバジリカを訪れることによって）前に述べたように、レオナール自身が祈りのためにどこかへ行くときに、自分の教会が奉仕者なしにあることを望まなかった[15]。

『聖レオナール伝』の成立以前、聖レオナール崇敬は、聖マルシアル崇敬の陰に隠れた目立たない存在であった。これは、司教座側にサン・マルシアル修道院と比肩しうる人々を引き寄せる手段がなかったことを意味する。換言すれば、司教座はリモージュ司教管区で巡礼と聖人崇敬を用いた人心掌握に失敗していたということである。司教座のサン・マルシアル修道院に対するコンプレックスを解消するために企画されたのが、『聖レオナール伝』であった。リモージュ司教から依頼を受けた匿名の『聖レオナール伝』編纂者は、サン・マルシアル修道院の影響力に対抗するために『聖マルシアル伝』を徹底的に研究し、対抗策を立てて、差別化を行った。

次章では、サン・マルシアル修道院のメディア戦略について概観する。その後で『聖レオナール伝』が如何

に差別化を行ったかを解明し、従来の聖人伝ごとの写本伝統の比較研究では、解明することができなかった対抗意識を浮かび上がらせるという本稿の課題に答えたい[16]。

第二章　サン・マルシアル修道院のメディア戦略

サン・マルシアル修道院は、いかにして名声を得たのだろうか[17]。当該修道院の聖人伝のバーションアップを駆使した絶妙なメディア戦略について本章では明らかにしたい。まずはサン・マルシアル修道院の宣伝活動の段階的な発展状況を時系列に辿りたい。一〇世紀に編纂された聖マルシアルの最初の伝記『ウィタ・アンティキオール』[18]は、マルシアルとペテロの関係を強調するものであったが、あまりに簡略な内容であり、宣伝効果は限定的であることが推測される。次に一〇世紀末から一一世紀初頭に『ウィタ・プロリクシオール』[19]と呼ばれる聖マルシアルの伝記が編纂される。こちらは十分に練り上げられた内容であり、一〇三〇年頃の神の平和運動期にアデマール・ド・シャバンヌは、その内容を発展させて使徒継承性を主張する論争を展開した[20]。成立年代から推定して、神の平和運動期に『聖マルシアル伝』の中心文書とされたのは、『ウィタ・プロリクシオール』であろう。

『ウィタ・アンティキオール』と『ウィタ・プロリクシオール』という二つの聖マルシアル伝の陰に隠れて目立たないが、実は両者を繋ぐ一〇世紀に編纂された『聖ヴァレリア伝』の重要性も看過し得ない[21]。これは広報的活動の成功による聖マルシアル崇敬の発展において画期を成すものであり、当該地域の最大の世俗権力であったアキテーヌ公権力を支持者として取り込むうえで、欠かせないものであった。『聖ヴァレリア伝』は、

このように重要な史料であるが、マルシアルの伝記の傍流として看過され、校訂版にも欠落箇所があった[22]。この欠落箇所では、マルシアルとペテロの関係が強調されている。『聖ヴァレリア伝』は、新旧の聖マルシアル伝を繋ぎ、ペテロの権威を強調する路線へといっそうマルシアルを導くことになったものと推測される。『ウィタ・プロリクシオール』では、以下の如くマルシアルに洗礼を授けたのはペテロとされている。

それで、主の命令でマルケルスが、もちろん妻のエリザベトとともに、そして希な才能を備えた彼らの息子マルシアルが、至福なる使徒ペテロから洗礼を受けた[23]。

ペテロによるマルシアルの洗礼以上に劇的な光景を挿入し、ペテロとの関係の強調とマルシアルの更なる権威付けを狙ったのが、「キリストの最後の晩餐」の給仕としてマルシアルが登場する場面である。

我らの主イエス・キリストが救いのための説教を終え、人の姿で弟子たちと食事をとり、そしてパンとぶどう酒の秘跡で自らの体と血の秘技を弟子たちに授けたとき、彼は食事の間に立ち上がって弟子たちの足を洗い、亜麻布で拭った[24]。

聖書にこのような記述は見受けられない。この記述がマルシアルの権威付けのための創作であることは言うまでもない。さらに『ウィタ・プロリクシオール』では、以下の如くペテロはリモージュをマルシアルにゆだねたと記されている。

実は、ガリア地方には、リモージュという名の不信仰の誤謬を免れた町があります。子の町とその周辺をキリストがあなたに委ねるのは、この町があなたの説教をとおして主自身から称えられるためです。あなたには長い道のりが残っているのだから、私の言葉に従うのをためらってはなりません。あなたは、私の

言葉によって、立派な褒美として自分の冠を手に入れるでしょう[25]。

当然のことながら、これらの『ウィタ・プロリクシオール』のマルシアルに関する記述は、史実に反する空想の産物に過ぎない。だが、『ウィタ・アンティキオール』や『聖ヴァレリア伝』などを通じて繰り返し敷衍され、練り上げられ、段階的に発展する多彩な描写は言説空間を超えて現実に影響を及ぼし、人々の心を捉えた。『ウィタ・プロリクシオール』の「ペテロによるマルシアル洗礼」「キリスト最後の晩餐の劇的場面におけるペテロの付添人としてのマルシアルの出席」「ペテロによるリモージュ司教位のマルシアルへの委譲」という上述の三つの権威付けの場面に対抗する権威付けの場面が『聖レオナール伝』には挿入されている。その点について、以下で具体的な事例に基づき明らかにしたい。

第三章　ランス大司教レミギウスとレオナール

『聖レオナール伝』では、『ウィタ・プロリクシオール』が引合いに出すペテロの権威に対抗し、フランク人改宗の立役者のレミギウスの権威が強調された。

『ウィタ・プロリクシオール』によると、マルシアルに洗礼を授けたのはローマ教会の礎を築いたペテロとされたが、それに対抗して、『聖レオナール伝』でレオナールに洗礼を授けるのはガリア教会の礎を築いたランス大司教レミギウスとされた。

レミギウスは、さらに貴族の両親の最も貴重な愛のために、真実を告げる証人たちのことばに従って、子供のレオナールに洗礼を授けた[26]。

『ウィタ・プロリクシオール』においてマルシアルはペテロの同伴者として位置付けられていたが、この記述に対抗して、『聖レオナール伝』は次の記述が示すように、レオナールをレミギウスの門弟とした。

だが、子供のレオナールは、子供の成長を脱して青年となった後、一族の習慣に従って、王の軍務によって巻き込まれることを望まず、しかし、むしろ聖霊に動かされて、ランス大司教レミギウスの跡を辿ることを望んだ。そしてレミギウスの有益な忠告に耳の聴こえない聴き手として注意を向けたのではなく、分別のある未来の種を蒔く者として心の奥に聴いたことをしまっておいた[27]。

『聖レオナール伝』では、レミギウスとの関係をいっそう強調するために、レオナールはレミギウスの政策の忠実な追従者であったとされた。ゆえにレミギウス同様にレオナールは大司教座都市ランスの囚人の解放の法令裁可に尽力したとされている。

すなわち前述の至福なるランス大司教の如く、彼はかつてフランク族の王たちに主を称えて次のような法令を裁可するように説得した。彼がランスの町に入ったり、通ったりするたびに、鎖にあるいは牢屋に繋がれていた誰もが、直ちにいかなる妨げもなしに自由なものとして解放されるように。そしてこの法令は、今日まで守られている[28]。

さらにレオナールは、レミギウスの政策をお手本として、王に願い出て自ら率先して囚人解放を行った様子が下記のように記されている。

そして、さらに良き師レミギウスに倣って良き弟子レオナールは、王から恭しい懇願によって次のようなことを願った。すなわち獄舎の禁庫に閉じ込められているすべての者たちは、レオナール自身が彼らを訪

問することを望むならば、完全に解放されるように。そしてそのことを王から寛大さとともにレオナールは獲得し、投獄された者たちがいると聞いたところでは、どこであろうと、怠けることなく全力で彼らの解放に向けて急いだ[29]。

『ウィタ・プロリクシオール』では、ペテロとマルシアルの緊密な関係を強調することで、マルシアルの権威付けが行われたが、『聖レオナール伝』では、ペテロの権威への対抗策としてレミギウスが引合いに出された。ローマ教会の権威にガリア教会の権威でもって対抗を試みたといってよい。

第四章　ガリア教会主義の言説とパトリオティスム

『聖レオナール伝』は、レミギウスとガリア教会の権威によってレオナールを権威付けようとしたが、その効果については疑問である。一方で『ウィタ・プロリクシオール』のペテロとローマ教会の権威によるマルシアルの権威付けは極めて効果的で中世初期のリモージュでマルシアルは周囲の宗教施設を圧倒する権威を誇っていた[30]。『ウィタ・プロリクシオール』が引合いに出したペテロの権威に対抗するには、レミギウスとガリア教会の権威だけでは不十分であったに違いない。そこで、『聖レオナール伝』には、『ウィタ・プロリクシオール』には見受けられない地縁的正統性と血縁的正統性と王権とのかかわりという三つの権威付けが行われている。

まずは、地縁的正統性についてであるが、ガリアという地名とレオナールの出生は深く結びつけられる。

従って至福なるレオナールは、皇帝アナスタシウスの時代にガリア地方で高名な両親から生まれた[31]。

次に出生だけではなく、成人してからもレオナールの活躍の場がガリアであったことが述べられている。『聖

レオナール伝』が描くレオナールは徹頭徹尾ガリアの人なのである。元来東方で活躍していたが、後に布教のためにガリアへやって来たユダヤ系外来者のマルシアルと異なり、レオナールは極めて地縁的な人物として描かれている。

そしてレオナールの徳のうわさは、全ガリアに激しく大きくなり、それゆえ病んでいる多くの人々が健康を回復するために群がった[32]。

このガリアという地名は、古代から存在するが、ゲルマン民族大移動時にローマ人にフランク人と呼ばれた人々が定住したため、次第にフランキアとも呼ばれるようになった。『聖レオナール伝』が描くレオナールは、ガリアという地名を使わない。レオナール自身の口からゲルマン人の部族的アイディンティティーを想起させる言葉を述べさせるというレトリックが用いられていることがわかる。

「敬われるべき父よ。私はあなたに懇願する。私たちに知らせてください。あなたがどこの国の出身か。あるいは今日どこから私たちのところに来たのか。あるいはあなたは何らかの医療の才能を持っているのか。」このことに対して、聖レオナールは次のように答えた。「確かに私の出生の国はフランキアです。そして悲しむ人々の嘆きは、あなたに向けて私を引き寄せた[33]。」

『聖レオナール伝』の他の箇所ではガリアという地名が用いられているが、この一節でレオナール自身にガリアをフランキアと言い換えさせたのは、レオナールの血統的正統性の証明のための次の挿話につなげるためであろう。

実際、彼（レオナール）の両親はフランク王クローヴィスの側近であり、宮廷の従者のなかで王に次いで

軍の首席を占めた[34]。

このように『聖レオナール伝』では、レオナールの祖先の血統は、王族とも親しいフランク人の名門家系に連なるとされている[35]。以上、『聖レオナール伝』において地縁的正統性、血縁的正統性に関して、レオナールは申し分なくガリア教会の正統の系譜に属することが証明されている。これらの正統性の証明によって、マルシアルに関する地縁的正統性、血縁的正統性に関する権威付けが弱い『ウィタ・プロリクシオール』との差別化を図ったのだが、キリスト教の五本山のひとつのペテロのローマ教会の権威の前では、レミギウスのガリア教会による権威付けだけでは不十分に感じられたに違いない。したがって、ガリア教会の権威の強調は、ローマ教会の権威との正面からの対立を意図したというよりも、ガリア教会の支持母体のフランク人と、狭い意味でのローマ教会の支持母体のローマ人の対立を際立たせるレトリックであり、パトリオティスムを刺激し、在地の人々の心情に訴えかけたものと推察される[36]。ガリア教会の権威不足を支持母体のパトリオティスムで補うという方策である。

リモージュ司教の選挙は、この頃「選考」（choix）から「選出」（élection）に変更された。その背景に司教座聖堂参事会の在地化がある。まさにそれと連動して『聖レオナール伝』の内容も在地化したといってよいかもしれない。

『聖レオナール伝』の編纂者は、ガリア教会の権威不足を王の権威で補強することも忘れなかった。この聖人伝の編纂者は後世のガリカニスムと違って、現実の弱体なカペー朝フランス王権ではなく、理想化されたクローヴィスのフランク王権とレオナールを結びつけようとした[37]。それゆえ何よりもまず、『聖レオナール伝』

において次の如くクローヴィスの劇的な改宗の場面が必要とされたのである。

そしてクローヴィス王は、彼の時代のはじめに民族の慣習に従って異教徒であったが、ランス大司教聖レミギウスの説教によって、キリストの信仰に向けて改宗させられ、キリスト教徒となった[38]。

この劇的な改宗の場面は、『ウィタ・プロリクシオール』の「キリストの最後の晩餐」という劇的な場面へのマルシアルの登場に対抗するために、なくてはならないものであった。レオナールの一族もこの時に劇的な改宗を行っていることを暗示する必要があったからである。

以上のように、『聖レオナール伝』においては『ウィタ・プロリクシオール』に対する差別化として地縁的正統性、血縁的正統性、王権とのかかわりという三つの権威付けを行うことによって、ペテロのローマ教会の権威に対していささか弱いレミギウスのガリア教会の権威が補強されている。そしてフランク王権に承認されたガリア教会の中心人物レミギウスを介してレオナールは王権と結び付けられた。

そして王にレオナールは答えた。「確かに人々の間で私はレオナール、全能の神の僕、至福なるレミギウスの恭しい傾聴者と呼ばれています。」そして王はこの善良な男レミギウスからレオナールが教えられたことを聴き、レオナールが神聖で寛大であることを信用した[39]。

『聖レオナール伝』によると、ガリア教会の礎を築いたレミギウスの学党に連なるレオナールの経歴を王は高く評価し、司教位へ推挙したという。この記述は、『ウィタ・プロリクシオール』のなかのマルシアルがペテロに評価され、司教位をゆだねられた場面を想起させる。

それゆえフランクの王は、名誉ある使節を通じてレオナールが自分のところへ呼び寄せられることを命じ

た。そしてレオナールに次のように言った。「神の人レオナールよ。あなたは、どこにも離れず私の宮殿のなかで私とともにとどまるように願う。そして、いつまでも司教の冠をちょうどあなたにふさわしいように、私から受け入れることを願う[40]」

以上の如く、徹頭徹尾、『聖レオナール伝』の挿話は『ウィタ・プロリクシオール』のマルシアルの挿話との差別化を意識したうえで配列されているのである。

『聖レオナール伝』が、ガリア教会主義を掲げて『ウィタ・プロリクシオール』に対抗したところで、使徒など聖書中に登場する大人物の権威と無関係である点にかわりはない。この権威の不足を補うために、『聖レオナール伝』では、パウロが述べた「キリストの競技者」という表現が用いられている。レオナールをあたかもパウロの異邦人教会[41]の後継者のひとりであるかのように位置づけるためであった。

このようなことを確かに行うことによって、キリストの競技者レオナールは、救済のかぶとと信仰の楯によって見事に武装し、始められた旅を続けた[42]。

強引にペテロのローマ教会の権威にパウロの異邦人教会の権威を対置させるというレトリックである。サン・マルシアル修道院の強力なプロパガンダ活動の前で後発の『聖レオナール伝』の編纂者が、レオナールの権威付けに如何に苦慮していたか垣間見える一節である。

リモージュ司教は、司教管区内の信仰と秩序の維持のための拠点の形成に向けて、かつてのルイ敬虔帝のコレジアル整備計画をアキテーヌへ適用した。かつて王権とガリア教会が企てた整備計画を司教が引き継ぐこととなる。コレジアル整備計画を実現する際に、聖マルシアル崇敬に対抗して、リモージュ司教区民に訴求しう

る聖遺物が不足している現状の克服という課題が、リモージュ司教の前に立ちはだかった。そこでリモージュ司教管区公認の聖人レオナールの崇敬の創出が方策として打ち出された。この人物がどのような聖人なのか、ほかならぬリモージュ司教が尋ねなければならないほど当時レオナールは知られていなかった。崇敬創出にあたり、いかにして正統性を主張するかが問題となったに違いない。レミギウス、ガリア教会、王の権威に加えて、レオナールの地縁・血縁的正当性や在地の人々のパトリオティスムにまで訴えかけたのは、グローバルなペテロの権威を掲げるマルシアルと対抗するための苦肉の策であろう。

圧倒的な影響力を誇るマルシアルに対抗するために、マルシアルとの完全な差別化という思い切った戦略が『聖レオナール伝』では採用された。ペテロについては一切言及しないという『聖レオナール伝』の編纂方針のそのあまりの徹底ぶりに驚かされる。ペテロの権威に立ち向かうためにパウロの権威を暗示し、それをローマ教会と異邦人教会の対立にすり替えるというレトリックを駆使して徹底した差別化を行った。さらにローマ人対フランク人という仮想現実の対立の構図を演出し、ガリア教会のなかのリモージュ教会のパトリオティスムに訴えかけ、リモージュの人々の支持を得ようとした。そうでもしなければ、神の平和運動の水面下で行われていた剣をペンに替えての戦いに勝利することはできないと『聖レオナール伝』の編纂者は判断したのであろう。

結論

リモージュ司教座とサン・マルシアル修道院は、ともに封建社会における公権力秩序の担い手としての正統

性を主張し、軍事的衝突に発展するまで争った。だが、一一世紀前半に蔓延した麦角性中毒のいわゆる「アントニウスの火」を神罰と考え、司教座とサン・マルシアル修道院は、神の平和を唱え、贖罪と手打ちの儀式を行った。

神の平和運動の水面下でサン・マルシアル修道院の宣伝活動に対抗すべく『聖レオナール伝』の編纂事業が開始された。この事業をサン・マルシアル側も黙ってみていたわけではない。才人シャバンヌのアデマールによる対抗プロジェクト『サン・マルシアル修道院年代記』の編纂事業が同時期に推進された。宣伝戦は徹底した差別化の様相を示した。『聖レオナール伝』は、聖人の霊験あらたかなありがたい挿話という表面上の姿とは裏腹に、神の平和運動の最中の剣の戦いからペンの戦いへの転換を象徴する論争的文書としての党派的な側面も併せ持っていたのである。神の平和運動の最中に勃発した宣伝戦は、二つの宗教施設の広報戦略の練磨を促し、双方の宗教的威信を高めた。そしてその威信はリモージュ司教管区を超えて広がった。

シャバンヌのアデマールが仕掛けたマルシアルの使徒継承性の主張の宣伝の成功例としては、南フランスのトゥールーズのサン・セルナン教会の使徒聖マルシアルの図像を挙げることができる。この図像は、一二世紀に入ると、リモージュ司教管区だけでなく、広くアキテーヌ地方においてマルシアルの使徒継承性の主張が相当程度認知されていたことの証拠といえよう。

『聖レオナール伝』の仕掛けた宣伝の成功例としては、巡礼の道の四大巡礼路のひとつの「リモージュの道」を別称「聖レオナールの道」として人々に認知させることに成功し、さらに四大巡礼路の記述からサン・マルシアル修道院を完全に排除することにも成功した事例を挙げることができる。

このように、リモージュ司教管区から始まり、アキテーヌ全域、西欧全域へと拡大の一途を辿る激しい宣伝戦の起点が神の平和運動のさなかの『聖レオナール伝』の編纂であった。そして『聖レオナール伝』の成立は、軍事力を用いた争いではなく、羊皮紙とペンによる中世都市リモージュにおける二大宗教勢力の争いの開始を告げるものであって、一一世紀後半から一二世紀初頭にかけてのリモージュ司教罷免事件やサン・マルシアル修道院出身司教の暗殺事件へとつながる確執の始まりでもあった。

本稿は、宗教組織が都市を支配するために聖人伝を用いた宣伝合戦を展開することで人心掌握と統治の技術が向上したことを二種類の聖人伝史料とそれらの各時代の異本の時系列の比較により動態的に把握するというＪＳＰＳ科研費研究プロジェクト（課題番号１５Ｋ０２９６０）「ヨーロッパ中世都市リモージュの宗教組織のメディア戦略の進化についての研究」の一環であり、在地の政治的利害の結節点としての列聖の国制的意義の解明を目的としたＪＳＰＳ科研費研究プロジェクト（課題番号２０Ｋ０１０６８）「中世盛期の西南フランスにみる列聖の国制的意義」の予備的作業でもある。

1 概要については次の研究を参照。C. de Lasteyrie, *L' abbaye de Saint-Martial de Limoges,* Paris, 1901; M. Soria-Audebert, Les évêques de Limoges face aux abbés : la question du soutien nobiliaire (milieu XIe-fin XIIe siècle), dans Claude Andrault-Schmitt (éd.), *Saint-Martial de Limoges : Ambition politique et production culturelle (Xe-XIIIe siècles),* Limoges, 2006, pp.101-114.

2 D.Barthélemy, *L'An mil et la paix de Dieu : la France chrétienne et féodale (980-1060),* Paris, 1999; éd.T.Head and R Landes,*The Peace of God,* Ithaca and London, 1992. B・テップファー（渡部治雄訳）『民衆と教会―フランスの初期「神の平和」運動の時代における―』創文社、一九七五年。今野國雄『ヨーロッパ中世の心』日本放送出版協会、一九九七年、一四〇－一六二頁。江川温「神の平和運動の軌跡が照らしだすもの―一一－一二世紀の平和理念と紛争処理―」服部春彦・谷川稔編『フランス史からの問い』山川出版社、二〇〇〇年、四-二四頁。

3 拙稿「一一世紀中葉の聖レオナール崇敬と聖堂参事会の改革」『愛大史学―日本史学・世界史学・地理学―』第二六号、五三－六八頁。

4 一二世紀初頭の状況については、拙稿「一二世紀初頭のサン・レオナール参事会教会に於ける律修化・巡礼・教会制度」『史林』第九三巻、第三号、二〇一〇年、八七－一〇二頁で検討した。

5 サン・マルシアル修道院の政治的野心に関する論文集の総括部を参照。M. Aurell, Premières conclusions : la dimension seigneuriale, politique et militaire de Saint-Martial de Limoges, dans Claude Andrault-Schmitt (éd.), *Saint-Martial de Limoges : Ambition politique et production culturelle (Xe-XIIIe siècles),* Limoges,

2006, pp.133-134.

6 古典的な郷土史研究としてアルベロの次の研究が刊行されて以来、研究は遅滞している。F. Arbellot, *Vie de S. Léonard, solitaire en Limousin*, Paris, 1883. 概略については、Barrière (dir.), *Saint Léonard de Noblat*, Limoges, 1995.

7 複数のヴァージョンが存在する。第二章で詳述したい。

8 Vita prolixior は、一〇世紀後半から一一世紀初頭に成立したと考えられている。Cf. Vita eivsdem S. Martialis episcopi Lemovicensis etgalliarvm apostoli, conscripta ab Avreliano Lemouicensium episcopo, Diui Marcialis auditore olim eius beneficto à mortuis excitato edita vero ex MS. Ecclesiae S.Marcialis Parisiis à R. Fr.Thoma Beaulxamis Carmerita: in L.Surius, De probatis sanctorum vitis (Cologne, 1618), 6: 365-374. 渡邉浩氏の註解と訳業を参照。渡邉浩「『リモージュ司教にしてガリアの使徒である聖マルシアルの伝記』(I–XIII) 試訳」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第一〇号、二〇〇九年、五九 - 七五頁。同「『リモージュ司教にしてガリアの使徒である聖マルシアルの伝記』(XIV–XX) 試訳」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第一一号、二〇一〇年、九九 – 一一五頁。同「『リモージュ司教にしてガリアの使徒である聖マルシアルの伝記』(XXI-XXVII) 試訳」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第一二号、二〇一一年、九三 – 一〇八頁。

9 レオナールの最初の伝記は、一一世紀前半のまさに神の平和運動期に編纂された。Société des Bollandistes (éd.), Vita S. Leonardi Nobiliacensia, Acta Sanctorum Bollandiana (Nov.) 3, Brussels, pp.149–155. 以下で

Vita S. Leonardi と略記する。

10 サン・マルシアル修道院の奇蹟を用いた宣伝活動については次の文献で論じられている。E. Bozoky, Les miracles de saint Martial et l'impact politique de son abbaye, dans Claude Andrault-Schmitt (éd.), *Saint-Martial de Limoges : Ambition politique et production culturelle (Xe-XIIIe siècles)*, Limoges, 2006, pp.59–69.

11 『聖人伝』(Vita)、『移葬記』(Translatio)、『奇蹟録』(Miracula) などに加え、中世後期になると『スンマリウム』『ポジッィオ』などが用いられるようになった。

12 本稿で扱う『聖レオナール第一伝記』は、一連の『聖レオナール伝』のなかで最初に編纂されたものである。

13 二〇二〇年一一月二八日(土)に開催された伊集院利明氏企画の愛知大学人文社会学研究所シンポジウム「『幸福』を考える—東洋、西洋、実証研究—」の第五報告「西欧中世の幸福:『聖レオナール伝』にみる至福なる人」で、レオナールの聖性について至福というキーワードを中心に検討した。この企画には、ギリシア哲学者、中国哲学者、心理学者、社会学者、歴史学者が参加した。

14 A. Poncelet, Commentarius praevius (*Acta Sanctorum*, nov. III, p. 139, ch. 2) : …Ita scribebat, illo jubente (Jordano), Hildegarius Carnotensis, tunc temporis scholastics Pictavensis, ad magistrum suum Fulbertum Carnotensem episcopum:《Jordanus etiam Lemovicensis episcopus…rogat suppliciter ut mittas ei Vitam sancti Leonardi in episcopatu suo quiescentis, ut aiunt…》

15 Moris enim saepissime erat sibi visitare basilicam sancti Martialis pontificis, et ideo ecclesiam suam absque servitore esse nolebat, dum ipse, sicut diximus, ad orationem aliquorsum pergebat. (Vita S. Leonardi, ch.9)

16 同系統の挿話が比較されており、有益であるが、宗教施設間の対抗関係については看過されている。Cf. G.Remensnyder, *Remembering kings past : monastic foundation legends in medieval southern France*, Ithaca, New York, 1995.

17 R. Landes ; C. Paupert, *Naissance d'apôtre. La vie de saint Martial de Limoges, un apocryphe de l'an Mil*, Turnhout, 1991; R. Landes, *Relics, Apocalypse and the Deceits of History. Ademar of Chabannes. 989-1034*, cambridge (Mass.), Londres, 1995.

18 Vita Antiquior の正式名称は Vita et miracula domni Marcialis episcopi 一〇世紀に成立したと考えられている。Cf. F. Arbellot, Etude historique sur l'ancienne vie de saint Martial, dans Bulletin de la Société archéologique et historique du Limousin, t.LX, 1892, pp. 213-269.　渡邉浩氏の註解と訳業を参照。渡邉浩「『主人である司教マルシアルの生涯と奇跡』試訳」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第一四号、二〇一三年。

19 すでに註記したように渡邉浩氏の訳業がある。

20 R. Landes, *Relics, Apocalypse and the Deceits of History. Ademar of Chabannes. 989-1034*, Cambridge (Mass.), Londres, 1995.

21 *Analecta Bollandiana*, t.8 (1889), pp.278-284; *Catalogus codicum hagiographicorum latinorum: antiquiorum saeculo XVI qui asservantur in Bibliotheca Nationali Parisiensi*, Hagiographi Bollandiani, 1889–1893, t.1, pp.196–198.

22 校訂版については、渡邉浩「『聖ヴァレリアの伝記 三章から五章』試訳」『藤女子大学キリスト教文化研究

所紀要』第一七号、二〇一八年、九三－九九頁参照。

23 渡邉浩「『リモージュ司教にしてガリアの使徒である聖マルシアルの伝記』(I–XIII) 試訳」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第一〇号、二〇〇九年、六〇頁。

24 前掲書、六一頁。

25 前掲書、六四頁。

26 Qui denique secundum verba testium veridicorum puerum Leonardum susucepit de sacro fonte ob parentum nobilium carissimum amorem. (Vita S. Leonardi, ch.1)

27 Puer autem Leonardus postquam evasit incrementa puerila adolescens factus iuxta consuetudinem parentelae regali noluit implicari militia, sed spiritu divino tactus potius voluit sequi archipontificis Remigii vestigia ; cuius salutaria monita non ut surdus auditor intendebat, verum ut prudens et futurus seminator in secretarium cordis audita reponebat. (Vita S. Leonardi, ch.1)

28 Nam sicut praedictus pontifex beatus Remigius olim Francigenis suaserat regibus ut tale pro Dei honore sancirent edictum, quatinus, quotienscumque intrarent aut transirent civitatem Remensium, quicumque in vinculis seu in carceribus fuissent detenti, confestim sine ullo impedimento dimitterentur liberi ; quod usque hodie conservatur ; (Vita S. Leonardi, ch.2)

29 ad imitationem vero boni magistri Remigii Leonardus bonus discipulus hoc ipsum expetiit a rege humillimis precibus, quatinus omnes qui in ergastulorum custodia detinerentur, si eos ipse voluisset

visitare, omnio solverentur. Quam rem a rege cum benivolentia impetravit et ubicumque incarceratos esse audiebat, non piger ad eorum absolutionem totis viribus concurrebat. (Vita S. Leonardi, ch.2)

30 すでに述べたように、一一世紀前半に成立した『聖レオナール伝』もマルシアルに言及しないわけにはいかなかった。一方で一二世紀に成立したオーレイユの『聖ゴーシェ伝』はレオナールのみに言及する。これは、聖レオナール崇敬が聖マルシアル崇敬に対抗しうる知名度を持ったことを暗示する。

31 Beatus igitur Leonardus temporibus Anastasii imperatoris in provincial Galliarum claris parentibus exstitit natus. (Vita S. Leonardi, ch.1)

32 Crescebat autem vehementer per totam Galliam fama eius bonitatis, proptereaque multi aegrotantes confluebant ad eum gratia recuperandae sanitatis. Beatus igitur Leonardus temporibus Anastasii imperatoris in provincial Galliarum claris parentibus exstitit natus. (Vita S. Leonardi, ch.3)

33 Rogo te, venerande pater, indica nobis cuius oriundus sis patriae, aut unde nobis advenisti hodie, vel si aliquod possides ingenium medicinae. Ad haec sanctus Leonardus respondit: Patria quidem nativitatis meae est Francia ; ad te autem me adduxerunt maerentium lamenta. (Vita S. Leonardi, ch.6)

34 Conlaterales vero Clodovei regis Franciae parentes eius erant et inter satellites palatii primatum militia post regem habebant. (Vita S. Leonardi, ch.1)

35 Amy G.Remensnyder, op.cit., p. 119. クローヴィスとの親密さの強調がサン・レオナール参事会教会の創建伝説の特徴であるという。

36 Cf. C. Beaune, *La Naissance de la Nation France.* Paris, 1985; C. Beaune, "Saint Clovis; histoire, religion royale et sentiment national en France," dans dir. B. Guenée, *Le métier d'historien au Moyen Âge,* Paris, 1977, pp.139–156.

37 Amy G.Remensnyder, *op.cit.,* p.294. 現実の王権とは程遠いイメージが形成された。

38 Ipse autem Clodoveus in primordio suae aetatis secundum morem gentilium fuit paganus, sed per praedicationem sancti Remigii fidem Remensium archiepiscopi ad fidem Christi conversusu factus est christianus. (Vita S. Leonardi, ch.1)

39 Cui sanctus Leonardus respondit : Inter homines quidem Leonardus dicor, servus Dei omnipotentis et beati Remigii humilis auditor. Rex autem audiens illum a bono viro fore eruditum, credidit eum sanctum ac benignum ; (Vita S. Leonardi, ch.6)

40 Quapropter rex Franciae ipsum ad se accersiri per honorabiles legatos iussit ; cui et dixit : Leonarde homo Dei, deprecor te, ut nusquam discedens in palatio meo mecum maneas, quousque infulam pontificalem, sicut dignus es, a me suscipias. (Vita S. Leonardi, ch.3)

41 パウロの使徒性に関する主張については、Ad Corintos (9,2) in Kurt Aland, Barbara Aland (éd.), *Novum Testamentum Latine,* Deutsche Bibelges, 1984, p.454.

42 Talia quidem operando athleta Christi Leonardus galea salutis et scuto fidei decenter armatus prosequitur iter initum. (Vita S. Leonardi, ch.4)

43 本稿では一〇三〇年頃の状況を中心に論じたが、一〇六〇年頃のサン・レオナール参事会教会とサン・マルシアル修道院の同時期の贖罪と国制の問題については稿を改めて論じたい。